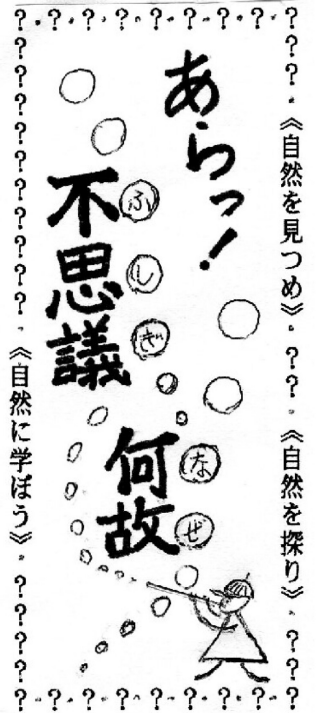


自然談議・科学談議



「麦踏み」の風物詩

最近の今頃は、田畑にほとんど人影がない。昔は寒風ふきすさぶ中、老若男女総出で「麦踏み」をしていたものだ。「こらっ、畑に入るな」じゃなくて「みんな畑に出て麦踏みませよ」だ。

かすめた。夕暮れ時の農村の情景が重なって見えたのだ。

麦を踏む風物詩とは

昭和16年頃から耕地整理が行われた。稲を収穫した田んぼはすぐに水を落とし、畑にした。所謂、二毛作時代だ。

今年の5月、山梨県甲府市の県立美術館で、ミレーの画を10数点見てきた。その中に、あの有名な「落穂拾い」や「種をまく人」があった。フランスの農村の情景がよく表現され印象に残った。

その畑には、大麦小麦や菜種・馬鈴薯などが栽培された。この12月の今頃は、ちょうど大麦小麦が芽生えて、成長を始める頃だ。その麦は、冬の弱まった日差しをすべて受け止めようと、葉をロゼット状に広げている。そんな麦を踏み付けてしまつてよいのだろうか。

NO. 30 (通算30)

絵・文・題字 渋谷 一夫

「麦踏み」の意味

秋、種をまいた大麦小麦も、もう芽生えて三ツ葉以上に成長した。これから更に、節と節との間の伸長が始まる。その途中早春まで、2,3回麦踏みを行うのだ。

具も使った。土砂をすくい上げ「じよれん」の篩ふるいで細かい土砂を麦の上にかける作業だ。目的は「麦踏み」と同じだ。

何故、踏み付けるのだろうか。これから寒くなり、霜柱が立ち、麦の根が浮き上がってしまうことがあるのだ。また、乾燥した強い北風が吹き、土が飛ばされ移動してしまふこともあるのだ。更に、あまり早く伸び過ぎてしまわないよう抑制したり、株分かれや耐寒性を増したりし、出穂が一樣になるようにし、特に、暖冬の年や早まきの場合、大変重要な作業なのだ。

これらの作業をしつかりやることで、麦の根がしっかりと根付くのである。大事な作業なのだ。だが、大麦小麦の栽培は、南畑の田畑では絶無に近くなった。半世紀前とは隔世の感がある。



麦を踏む人



じよれん

また、「じよれん」という農